

# 「大澤壽人遺作コレクション」経過と現在

生島美紀子

大澤壽人(おおさわ・ひさと、1906—1953)先生の資料は、2006年8月にご長男壽文氏より神戸女学院に寄贈された。ダンボール約43箱分にも及ぶ貴重な遺品の数々は、濱下昌宏前図書館・史料室長を中心とする委員会で「大澤壽人遺作コレクション」と正式に名づけられ、学院の宝となった。ことにコレクションの中心である自筆譜は、ラック3台に積み上げられた圧倒的な量で、閲覧室を訪れる者の目を見張らせる。

私たちは2006年12月より自筆譜の整理を始め、先生の生誕100年を越えた2007年の作品目録刊行を目指した。そして2007年12月4日、《ヴァイオリン小協奏曲 支那詩》(1937年)が、初演以来70年を経て音楽学部定期演奏会で演奏(ヴァイオリン独奏：辻井 淳准教授、指揮：中村 健教授)された日、会場である兵庫県立芸術文化センター大ホールロビーにおいて、『煌きの軌跡 大澤壽人作品資料目録』(音楽学部同窓会クラブファンタジーの全面的支援)を刊行した。ここでは寄贈から目録編纂へ向けた歩みが映し出した3側面—たずさわった関係者の協力、作業の具体的な経過、それに伴うスタッフたちの成長—及び、外部への普及についてご報告したい。

コレクションには共同の受け入れ先である図書館、史料室、音楽学部において、大勢が関わった。図書館・課長水野敬子さん、阪上澄子さん、史料室・佐伯裕加恵さん、富岡ひとみさん、音楽学部・事務長竹下直美さん、樋口 徹さんが、各組織において、委員会やそれぞれの立場でご尽力下さった。これらの方々の的確なお働きと協力があつてこそ、目録はわずか1年で形をとり、外部への資料公開が可能となった。

また自筆譜整理と目録編纂の現場においても、本学院の同窓生ボランティアとスタッフとの協力が推進力となった。クラブファンタジー会報に掲載させていただいたボランティア募集や、あるいは口伝えて話を聞いた多数の同窓生が作業に参加し、ご奉仕下さったのである。

具体的な作業は、第Ⅰ期が2006年12月にスタートした。当初は作品総数約70という情報以外ほとんど不明であったため、まずは創作活動の概要把握に努めた。楽譜を端から一つ一つ手に取り、「整理」（番号をうった新しい袋へすべての作品を入れ直す）をした上で、「簡易作品リスト」（番号に従って中身の内容を記載する）を作成する。この作業を2007年3月まで継続し、総数は実際にはこれまでに知られている10倍以上あり、創作ジャンルが多岐に広がっていることを確認した。

続く2007年4月から11月までの第Ⅱ期には、目録編纂に向けた作業と、スキャナを用いた楽譜のデータベース化を並行して行った。編纂作業は、楽譜それぞれの情報を読み込み、目録の入力項目を網羅した書式に転記する。表紙と第1頁に記載された作品名や署名、創作年月日、共同制作者、用いられた筆記具の種類などの基本情報を記録してゆく一方で、作品毎に楽器編成、各楽章のテンポ・頁数・調号・小節数、歌い出しや他の同一資料の照合などの楽譜情報を詳細に調べる作業である。交響曲や協奏曲には総譜100頁を越す大作も多く、これらの読み込みと転記には、集中力と緻密さに加えて、時間と忍耐が必要であった。

作業の中心となった6名のスタッフは、増永智子・松川峰子・牛尾晶子(M120)・高野雅子(M121)・清水裕子(M122)・田中聖子(M123)さんである。増永さんと清水さんは、それぞれ初期整理とデータベース化において専任となって働いた。1300にも及ぶ整理用外袋と簡易作品リストのほとんどが増永さんの手で記されているように、第Ⅰ期における彼女の献身なしでは短期間での目録刊行は実現しなかっただろう。清水さんは楽譜のコンピュータ処理を一手に引き受け、色調の異なる楽譜への微調整や、利用者の使いやすさを念頭においたファイル作成、また目録の写真頁編集なども手がけた。彼女の知識と技術があ

ってこそ、早期より外部に資料を提供できた。他の4名は第Ⅱ期において、演奏家としての能力や優れたソルフェージュ力を存分に発揮した。

目録編纂の過程は地味ではあるが、作曲家の自筆譜に「ごく間近で」接するという、稀な機会をスタッフたちに与えるものでもあった。音符の数々が生む躍動感やフレーズラインの流動感など、大澤先生の筆致は申し分なく美しく、創作時のエネルギーや息遣いまで伝えるような勢いがある。これらに接するうちに、彼女たちは作品を是非演奏したいという意欲をかきたてられた。先生作品には若い音楽家の心を刺激し、成長させる影響力があったと言えよう。

この意味において、コレクションは次世代を育てる生きた教材として貴重である。先生が遺された華やかな音楽人生の「煌きの軌跡」、その煌きは軌跡をたどる次の世代に、今も導灯のような輝かしさを放っている。

2008年からは「大澤壽人遺作コレクション」の本格的な活用が始まった。寄贈以来膨大な資料に目を通し、多様なジャンルに亘ってこれほどの作品を遺された創作力の素晴らしさと、質的量的に充実したコレクションの貴重さを痛感している。今後は外部からの資料提供依頼に応じるだけでなく、先生の音楽を積極的に世に知らしめる普及の役割も、本学院に課された使命であろう。1月30日に行われたリーガロイヤルホテル大阪に於ける目録刊行記者会見(クラブファンタジーとの共同開催、会見者：大澤壽文氏・片山杜秀氏・松澤員子院長・岡田晴美名誉教授・濱下昌宏前図書館史料室長・若本明志前音楽学部長・生島)には、新聞大手6社と音楽クリティック・クラブの出席を得、翌週2月6日に日本経済新聞、7日に読売新聞に大きく報道された。

私たちは数年後の『大澤壽人全資料目録』刊行を目指し、新たな作業段階に入った。プログラム、ポスター、演奏会評、書簡、音源、写真等の整理を通して、大澤先生の足跡をさらにたどりつつ、コレクションの一層の活用方法を考えてゆく所存である。

(音楽学部非常勤講師)